

## 『歌舞伎の舞台装置について』

釘 町 良 一（舞台装置家）

## 大道具の世界

私は、歌舞伎の大道具を昭和24年に17歳から始めまして、18歳のときに日本大学に入学しました。その頃から私は歌舞伎の大道具の世界に飛び込みましたが、実は歌舞伎の道具についての「定式」というのは、誰からも教わっていないのです。なぜなら、やはり歌舞伎の大道具といった世界は職人の世界ですし、歌舞伎の世界では、いつでも「いつもの通り!」とか「定式だよ!」という教わり方をしていました。これは歌舞伎の台本を読んでいただく和理解していただけるかと思いますが、「真中三間の屋台、上手つけあたり九尺、下手よきところに門口、井戸があり…」という記述だけで歌舞伎の道具はできてきたことからもご理解していただけるかと思いますが、特に舞踊に注目してみても、坪内逍遙先生の「お夏狂乱」は、初演は亡くなられた尾上梅幸さんで、歌舞伎俳優なのです。ですから、そこで創られたものは、やはり大道具の職人たちはそれをよく踏まえた上で大道具を製作しています。それはなぜかといいますと、みなさんご承知の方も多いかと思いますが、歌舞伎の大道具の歴史の中で大変重要な人物である、長谷川勘兵衛という人物は、江戸の大道具では、現在十七代まで続いています。ところがその勘兵衛の代々でつくられてきた「廻り舞台」や「セリ」「仕掛物」といったものは、それぞれの時代にそれぞれが工夫したものであって、あまり「俺の特許だよ。」みたいなことは言わないのです。それは出来て当たり前。できない者は「使えないものにならない。」というように言われてしまう厳しい中で育てられているからです。また、大道具職人の世界も浮世絵を基本に受け止めて習ってきています。ですから、芝居の絵は、浮世絵スタイルを採用していますので、透明度が非常に少ないのです。言わば不透明な色が多いのです。しかし、それが同時に衣裳の鮮明さとマッチして大変よかったのだらうと私は推察しています。

## 色彩技術の発達

昭和20年代には、まだ絵具が膠（にかわ）を使った顔料で、当時は泥絵具という日本画の顔料とては一番安いものを膠で溶いて使っていました。そうしますと、色がとても不透明であり綺麗にならないのです。ところがそれに変化をもたらしたものが「照明」によるものでした。昭和初年、つまり帝劇（帝国劇場）が開場した頃から照明技

術というものがとても綺麗になってきたので、絵のほうも今までの技法では汚いという感じがするようになるので、かなり美術的にも技術革新に一生懸命に力を注いだ結果、現在では比較的透明度のあるものになりつつあります。ところが、透明度を増やせば増やすほど、油絵のようになってしまうのです。そうしますと、歌舞伎の色彩から離れていってしまいます。歌舞伎らしくなくなってしまうということです。

## 大道具に携わる喜び

ですから、私が50年この仕事をやってきまして、みなさんに自分がやってきた証しとして言えるのは、「弁天小僧」の立ち回りの大屋根がひっくり返ると、裏から山門がセリから上がってくるところで、今までは大屋根を木で作ってきたのを、鉄骨でつくるようにしたということです。なぜ今までは木製だったのかと言いますと、昔は舞台が八間ぐらいの間口が限界だったのです。それはセリが4～5間ぐらいがいいところだったからなのです。言わばその大きさのものが仕掛物としてつくられる限界だったのですが、戦後できた歌舞伎座の12間や国立劇場の10間の舞台では、大きな仕掛けをやりますと、危険度がとても高いので、そういうことに関する技術革新は職人の世界でずいぶん変わってきています。沢瀉屋の仕掛物にしても、そういったことで随分変わってきていますが、「黒塚」を例にしますと、猿之助さんに言わせれば、松の位置による月影の位置にしても、照明さんとの話合いによって、自分の立っている位置からみて、「この松の影が…」というような思い入れで位置を決めるような考え方が舞台の演出でも反映するようになってきています。ですから、こういうことになってくると、「いつもの通り」といったことが、かなりそうではなくなってくることは確かなことだと言えます。しかし、基本的な舞台は「いつもの通り」を知っていなくてはだめだということも前提でして、私ども裏の人間は芝居が好きでなければやっても意味がないということもいえますし、いろいろなことを知っていると大道具は務まらないのです。よって、非常に大道具は道楽商売で幸せな仕事です。好きでやっているから大道具を育てていられる。そしてそれがこういう世界に生きている人間の一番の喜びなのです。ですから、本来は大道具に関しているいろいろな言わせて頂くのは、本来はあまりよいこ

とだと思っ  
ていません。自分たちが喜んでやっ  
ていることなので、人様の前で言うことは、  
本当は何もないはずなのですが、たまたま私も年  
をとりまして、今の若い世代とだいぶ格差が生じ  
てしまって、わからなくなってしまうこと  
も出てきた次第で、お話をさせてもらうこと  
になったのです。

#### 温習会への大道具の導入

日本舞踊のおさらい会等で大道具が使われるよ  
うになった起源に関しましては、これは大変難問  
題です。実は、桧舞台に関しましては、舞踊家は  
明治の頃まで踏むことはありませんでした。桧舞  
台を踏めるというのは、歌舞伎の役者等に限ら  
れていました。因みに「桧舞台」といいますのは所  
作台のことではありません。舞台が桧板であつた  
という意味です。ですから、現在でも関西の歌舞  
練場ですとか、先斗町の歌舞練場では所作台を  
使用せず、舞台板が桧になっています。こうい  
ったことを含め、今私は所作台を作ったのはいつ誰  
なのかということ悪戦苦闘している最中なのです。  
これがこれからの私の課題なのですが、ただ14代  
の長谷川勘兵衛が「金閣寺」という芝居をやり  
ましたときに、この芝居は二階建ての芝居でし  
た。ところがその当時14代勘兵衛は、大正末にはもう  
亡くなっていますので、それ以前の劇場とい  
うことになりませんが、舞台の高さが12尺ぎり  
ぎりくらいなのです。12尺といいますが、3m60cm  
しかないわけですから、そこで二階建てを作る  
のは、それだけで大変なのに、芝居の特徴とし  
て、舞台を綺麗にみせなければいけないので、  
どうしても所作台を使う。しかし、その4寸の  
高さのために舞台に二階建てを作るのが大  
変だったという記録を少し拝見したことがあ  
ります。しかし、それをいつ誰が書いたのかは、  
わかりません。

#### 温習会への屏風の導入

日本舞踊としては、通常、料亭の貸席とかで踊  
られていました。しかし、大道具を使用してい  
たことで認識していたのは、日本橋の戦前  
にあった日本橋倶楽部です。それから九段の軍  
人会館もそうだったと記憶しています。また、  
日比谷公会堂や【仁寿講堂】では、完全に所  
作台を使っていたし、これは日本舞踊家のお  
さらい会でした。

屏風の用法として一番簡単な使い方という  
のは、われわれの場合ですと、地方の後ろな  
のです。舞台へ座敷舞を持ってきたときに、  
地方さんが上方唄とか一中節とか、女性  
の地方さんですと、声がみんな後ろにと  
んでしまうのです。ですから、背の高い  
ものではなくて、普通の6尺ぐらいの  
屏風を置いておくというのが、非常に  
便利な使い方、勝手な使い方です。こ  
れがひょっとすると日本舞踊で使  
用した屏風の用法としては一番最初  
かもしれません。これはもちろん戦  
後のことですが、

戦前の舞台、恐らく上方では、例  
えば歌舞練場などは、舞台を座敷  
の様子に飾っても、間から何か  
違う装置を出したりするときに、  
屏風を利用したということを知  
っていますが、いつどこでとい  
うことはわかりません。

#### 色彩の工夫

大道具でアクリル塗料を使うとい  
うことが経済的にも、また変色  
もしないということもあります  
ので、実際には、まだ歌舞伎  
の世界では顔料は膠で溶いた  
ものを使ったほうがいい部分  
もあるのです。しかし、現在  
の歌舞伎に対応するためには  
場所も大きくなってきていま  
すし、素材も変わってきて  
いますので、色もどんどん  
変わると思われるのですが、  
実際には変わっているのが  
わからないように変える  
のが、一つの方法だと思  
っています。お客様やみな  
さんは替わっていないと思  
っていても、実際には戦  
前の道具と、今の道具を  
比べると、まったく違  
います。私も戦前の色の  
ものは多少持っていますが、  
それらと現在のものを見  
比べるとまったく色が  
違うのです。ところが、  
みなさんは、やっぱり  
今の色も昔と同じ歌舞  
伎の色だと思っている。  
実は、そこが職人の  
世界のいいところだ  
と思っていますので、  
それは絶対に残して  
いきたいと思っています。  
例えば、京都の一  
力茶屋の塗り壁を  
実際に行き見ると  
こんなすごい色  
かと思っ  
てしま  
いますが、  
実際の  
舞台  
では、  
なん  
となく  
らしい  
色で  
みな  
さん  
が納  
得し  
てく  
れる  
色  
で  
あれ  
ばよ  
い訳  
です。  
です  
から  
京壁  
の色  
とか、  
それ  
から  
砂壁  
の色  
でも  
昔の  
色と  
は違  
うの  
です。  
でも、  
みな  
さん  
が舞  
台を  
ご覧  
にな  
って、  
「ああ  
砂壁  
だな」、  
とか  
「京壁  
だな」と  
思っ  
てく  
ださ  
って  
い  
るこ  
とが  
大  
事な  
ので  
あ  
って、  
実際  
に塗  
って  
い  
る色  
は実  
は昔  
と今  
では  
ま  
た  
く  
違  
う  
の  
です。  
しか  
し、  
そ  
んな  
こ  
とを  
みな  
さん  
に教  
える  
必要  
もな  
いし、  
みな  
さん  
がそ  
う思  
って  
く  
ださ  
れば、  
それ  
でよ  
いの  
です。